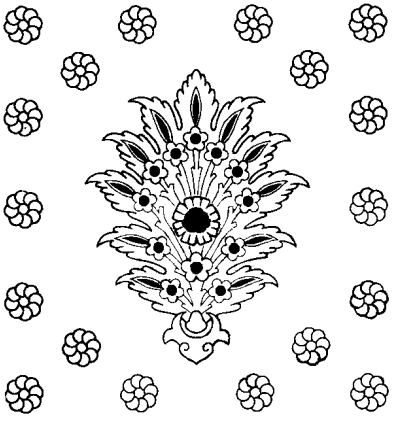
日本文学全集 37

牧野信一
梶井基次郎



集英社

日本文学全集
全88巻

37 牧野信一 梶井基次郎集

昭和四十八年五月八日 初版
昭和五十六年七月二十日 六版

著者 牧野信一 梶井基次郎

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
〒101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇
電話 出版部 東京(238)二六四二
販売部 東京(238)二七八一

印刷 中央精版印刷株式会社

著者との了解により検印廃止いたします。
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

©1973 Printed in Japan

0395-123037-3041

編集委員

伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装幀　後藤市三

挿絵　岩崎鐸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

牧野信一集

地球儀　九
父を売る子　一四
父の百カ日前後　二七
西瓜喰う人　五六
鱗雲　七〇
村のストア派　九三
吊籠と月光と　一一三
西部劇通信　一二八
ゼーロン　一三五

バラルダ物語　一五一
酒盗人　一七二
泉岳寺附近　一八七
鬼涙村　一九九
裸虫抄　二一四
淡雪　二二七

梶井基次郎集

檸檬　二四五
城のある町にて　二五一
泥濘　二七三
路上　二八〇

橡の花　二八五
過古　二九六
雪後　二九八
ある心の風景　三〇五
Kの昇天　三一三
冬の日　三一〇
蒼穹　三二三
筧の話　三二六
器楽的幻覚　三三八
冬の蠅　三四一
ある崖上の感情　三五一
桜の樹の下には　三六四

愛撫　三六六
闇の絵巻　三六九
交尾　三七三
のんきな患者　三七九
注解　三九七
作家と作品　平野　謙　四一三
年譜　四四四

牧野信一集

酒友大風（[illegible]）譚

牧野信一

一

山西の名前は大風と称ばれた。雅号ではなくて、本名である。その頃僕は大風の養家先である石神村の寒林寺に滞在してゐた。

石神村は熱海線の眞鶴驛と根府川驛の中間にあたる山ふところの漁村で、寒林寺は村端

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地球儀

祖父の十七年の法要があるから帰れ――という母からの手紙で、私は二ヶ月ぶりぐらいで小田原の家へ帰った。

「このごろはどうなの？」

私は父のことを尋ねた。

「だんだん悪くなるばかり……」

母は押入を片づけながら言った。続けて、そんな気分を振り棄てるように、

「こっちの家はほんとに狭くてこんな時にはまったく困ってしまう。第一どこに何がしまってあるんだか少しも分らない」などと呟いていた。

「僕の事をおこっていますか？」

「カンカン！」

母は面倒くさそうに言った。

「ふふん！」

「これからもうお金なんて一文もやるんじゃないッて――私まで大変おこられた」

「チェッ！」と私はセセラ笑った。きっとそうくるだろうとは思っていたものの、明らかに言われてみるとドキッとした。セセラ笑ってみたところで、私自身も母も、私自身の無能とカラ元気とをかえって醜く感ずるばかりだ。

「もうお父さんの事はあてにならないよ。あの年になってのことだもの……」

これは父の放蕩を意味するのだった。

「勝手にするがいいさ」

私はおこったような口調で呟くと、いかにも腹には確然としたある自信があるような顔をした。こんなものの言い方やこんな態度は、私がこのごろになって初めて発見した母に対する一種のコケトリイだった。だが、私が用うのはいつもこの手段のほかはなく、そうしてその場限りで何の効もないので、今ではもう母の方で、もう聞き飽きたよという顔をするのだった。

「もう家もおしまいだ。私は覚悟している」と母は言った。

私は、母が言うこの種の言葉はすべて母が感情に走って言うのだ、という風にばかりことさらに解釈しようと

努めた。
「だけど、まアどうにかなるでしょうね」
私は何の意味もなく、ただ自分を慰めるように易々と見せかけた。こんな私の楽天的な態度にもすっかり母は愛想を尽かしていた。
母は、ちょっと笑いを浮べたまま黙って、煙草盆を箱から出しては一つ一つ拭いていた。
私も、話だけでも、父の事に触れるのは厭になった。
「明日は叔父さんたちも皆な来るでしょう」
「皆な来ると言って寄こした」
また父の事が口に出そうになった。
「躑躅がよく咲いてる」と私は言った。
「お前でも花などに気がつくことがあるの」
「そりゃ、ありますとも」と私は笑った。母も笑った。
「ただでさえ狭いのにこれ邪魔でしようがない。まさか棄てるわけにもゆかず」
母は押入の隅に嵩張っている三尺ほども高さのある地球儀の箱を指差した。——私は、ちょっと胸を突かれた思いがして、かろうじて苦笑いを堪えた。そうして、
「邪魔らしいですね」と慌てて言った。なぜなら私はこの間その地球儀を思いだして一つの短篇を書きかけたからだった。
それはこんな風にきわめて感傷的に書きだした。——
『祖父は泉水の隅の灯籠に灯を入れてくるとふたたび自分独りの黒く塗った膳の前に胡坐をかいて独酌を続けた。同じ部屋の丸い窓の下で、虫の穴がところどころにあいている机に向って彼は母から*ナショナル読本を習っていた。
「*シイゼエボオイ・エンドゼエガアル」と。母は静かに朗読した。竹筒の置ランプが母の横顔を赤く照らした。
「スピンアトップ・スピンアトップ・スピンスピン——回れよ独楽よ、回れよ回れ」と彼の母は続けた。
「勉強がすんだらこっちへ来ないか、だいぶ暗くなった」と祖父が言った。母はランプを祖父の膳の傍に運んだ。彼は縁側へ出て汽車を走らせていた。
「純一や、御部屋へ行って地球玉を持ってきてくれないか」と祖父が言った。彼は両手で捧げて持ってきた。祖父は膳を片づけさせて地球儀を膝の前に据えた。祖母も母も呼ばれてそれを囲んだ。彼は母の背中に凭りかかって肩越しに球を覗いた。
「どうしても俺にはこの世が丸いなどとは思われないが……不思議だなアー」祖父はいつものとおりそんなことを言いながら二三遍グルグルと撫で回した。「ええと、どこだったかね、もう分らなくなってしまった、おい、

ちょっと探してくれ」
　こう言われると、母は得意げな手つきで軽く球を回してすぐに指でおさえた。
「フエーヤー？　フエーヤー……チョッー　幾度聞いてもだめだ、すぐに忘れる」
「ヘーヤーヘブン」と母はたちどころに言った。
　それは彼の父（祖父の長男）が行っている処の名前だった。彼は写真以外の父の顔を知らなかった。
「日本は赤いからすぐ解る」
　祖父は両方の人差指で北米の一点と日本の一点とをおさえて、
「どうしても俺には、ほんとうだと思われない」と言った。
　祖父が地球儀を買ってきてから毎晩のようにこんな団欒が醸された。地球が円いということ、米国が日本の反対の側にあること、長男が海を越えた地球上の一点に呼吸していること――それらの意識を幾分でも具体的にするために、それを祖父は買ってきたのだった。
「どこまでも穴を掘って行ったらしまいにはアメリカへ突き抜けてしまうわけだね」
　こんなことを言って祖父は、皆なを笑わせたり自分もさびしげに笑ったりした。
「純一は少しは英語を覚えたのかね」
「覚えたよ」と彼は自慢した。
「大学校を出たらお前もアメリカへ行くのかね」
「行くさ」
「もしお父さんが帰ってきてしまったら？」
「それでも行くよ」
　そんな気はしなかったが、間が悪かったので彼はそう言った。彼はこの年の春から尋常一年生になるはずだった。
「いよいよ小田原にも電話が引けることになった」
　ある晩祖父はこんなことを言って一同を驚かせた。
「そうすれば東京の義郎とも話ができるんだ」
「アメリカとは？」彼は聞いた。
「海があってはだめだろうね」
　祖父はまじめな顔で彼の母を顧みた。
　彼は誰もいない処でよく地球儀を弄んだ。グルグルとできるだけ早く回転さすのがおもしろかった。そして夢中になって、
「早く廻れ早く廻れ、スピンスピンスピン」などと口走ったりした。するといつの間にか彼の心持は「早く帰れ早く帰れ」という風になってくるのだった。
　そこまで書いて私は退屈になって止めたのだった。い

つか心持に余裕のできた時にお伽噺にでも書きなおそうなどと思っているが、それも今まで忘れていたのだった。球だけ取り脱して、よく江川の玉乗りの真似などして、

「そんなことをすると罰が当るぞ」などと祖父から叱られたりしたことを思いだした。

「古い地球儀ですね」

「引越しの時から邪魔だった」

それからまた父の事がうっかり話題になってしまった。

「私はもうお父さんのことはあきらめたよ。家は私ひとりでやって行くよ」と母は堅く決心したらしくきっぱりと言った。私はたあいもなく胸がいっぱいになった。そうして口惜しさのあまり、

「その方がいいとも、帰らなくったっていいや、……帰るな、帰るなだ」と常規を脱した妙な声で口走ったが、ちょうど『お伽噺』の事を思いだしたところだったので、突然テレ臭くなって慌てて母の傍を離れた。

翌日の午には、遠い親類の人たちまで皆な集った。

「せめて純一がもう少し家のことを……」

「そういうことなら親父でも何でも遣りこめるぐらいな気概がなければ……」

「ほんとにカゲ弁慶で――そのくせこのごろはお酒を飲むとむちゃなことを喋ってかえって怒らせてしまうんですよ」

「酒！　けしからん。やっぱり系統かしら」

叔父と母とがそんなことを言っているのを私は襖越しで従兄妹たちと陽気な話をしていながら耳にした。私のことを話しているので――。

「この間もひどく酔って……外国へ行ってしまうなんて言いだして……」

「純一が！　ばかな」

「むろん、あの臆病にそんなことができるはずはありませんがね」と母は笑った。

「気の小さいところだけは親父と違うんだね」

客が皆な席に整うと、私は父の代りとして末席に坐らせられた。坐っただけでもう顔が赤くなった気がした。

「今日はわざわざ御遠路のところをお運びくださいまして……（えええと？）じつは……その誠に恐縮なことで……そのじつは父が四五日前から止むを得ない自分自身（オッといけねエ）……ええ、止むを得ない自分用で、じつはその関西の方へ出かけまして、今日は帰るはずなのでございますがまだ……それで私が……（チョッ、弱

ったな）……どうぞ御ゆるり……」

私はこれだけの挨拶をした。括弧の中は胸での呟き言だった。ちゃんと母から教わった挨拶でもっと長く喋らなければならなかったのだが、これだけ言うのに三つも四つもペコペコとお辞儀ばかりしてごまかしてしまった。そしてこの挨拶のしどろもどろを取りなおすつもりで、胸を張ってできるだけもっともらしい顔つきをして端坐した。だが脇の下にはほんとうに汗が滲んでいた。

「これが本家の長男の純一です」

父方の叔父が、まだ私を知らない新しい親類の人に私を紹介した。そして私の喋り足りないところを叔父が代って述べたてた。

だいぶ酒が廻ってきて、祖父の話が皆なの口に盛んにのぼっていた時、私は隣りに坐っている叔父に、

「僕の親父はなぜあんなに長く外国などへ行っていたんでしょうね」と聞いた。今さら尋ねるほどの事もなかったのに——。

「やっぱりその……つまりこのお祖父さんとだね、いろいろな衝突もあったし……」

——やっぱり——と言った叔父の言葉に私はこだわった。

「何ぼ衝突したと言ったって……」

「今これでお前が外国へ行けばちょうど親父の二代目になるわけさ。ハッハッハッ……」

「ハッハッハ……。まさか——」と私も叔父に合せて笑ったが、笑いが消えないうちに陰鬱な気に閉された。

翌日、道具を片づける時になると母はまた押入の前で地球儀の箱を邪魔にし始めた。

「見るたびに焦れったくなる」

「そんなことを言ったって、しようがないじゃありませんか」と私は言った。「どうすることもできない」

「たいして邪魔というほどでもない」

「だってこんなもの、こうしておいたって何にもなりはしない、いっそ……」

母は顔を顰めて小言を言っていた。

——今に英一が玩具にするかもしれない——私はも少しでそう言うところだったが、突然またあの「お伽噺」を思いだすと、自分で自分を撲るような思いがして、そのまま言葉を呑みこんでしまった。

英一というのは去年の春生れた私の長男である。

父を売る子

彼は、自分の父親を取りいれた短篇小説を続けて二つ書いた。

ある事情で、ある日彼は父と口論した。その口論の余勢と余憤とで、彼はそれまで思い惑うていたところの父を取り入れた第一の短篇を書いたのだ。その小説が偶然、父の眼に触れた。父親は憤怒のあまり、

「もう一生彼奴とは口を利かない。——俺が死ぬ時は、病院で他人の看護で死ぬ」と顔を赤くして怒鳴ったそうだ。だから彼は、それを聞いて以来、往来で父の姿を見かけると慌てて踵を回らせた。彼らはひとつの小さな町に住みながら、父と母と彼とそれぞれ別々の家に住んでいた。

それゆえ彼は、もう父親には破れかぶれになっていたから第二の短篇はやすやすと書いてのけた。その上、今も彼が二カ月ばかり前から書きかけているのは、またも父親を取り入れたものだった。それがもし滞りなくできあがったら、彼はそれに「父を売る子」という題名をつける気でいる——次の話は彼がまだその第一の短篇を書かなかったころのことである。

一

その晩も彼と父とは、酒を酌み交しながらのんきな雑談に耽っていた。晩春の宵で、静かな波の響きが、ちょっと話が跡切れると微かに聞えた。——父の妾の家の二階だった。

「貴様の子供はいつ生れるんだ？」

忘れっぽさを衒って、父は彼にそんなことを訊ねた。二人とも、もうイイ加減酔って、口角をそろえて親類の悪口を言い合っていたがちょっと跡切れたところだった。

「六月だそうだ」と彼も父の態度を模倣してわざと空々しく呟いた。

「いよいよ親父になるのか、貴様が！」

父はそう言うと、傍の女を顧みてぎょうさんに哄笑した。

「そして——」と彼は言った。この阿父さんは——と言うのは具合が悪かったので、眼だけで父を指摘して、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com